

(研究会の記録から)

[脇・心霊講座から]

われわれに「厄」があるのか
……あらためて人間を見直そう

「厄」の意味するもの

陰陽師の教えによると、人間の一生には危ない事態に幾度も遭遇するものであるという。たとえば災難、厄災、厄年という類のもの。このうち厄年は、古くから伝えられているものとして、男33歳、女37歳、73歳。また、ある説によると、男25歳、42歳、80歳、女19歳、38歳とされている。

◎ 案外多い「迷信家」

「厄」の定義というものを上のおり要約してみた。ところで、近頃この厄を堂々と宣伝している人たちがいる。その拠り所はいわゆる「太陰暦」といわれる「旧い暦」である。ではあるが、日常生活の中で不幸、あるいは思いもよらない疾病に冒されるということを含め、不幸、不運、災難等というものがつづく、誰から教えられてというものでもなく、また、それが一般に認められているという意味でもないが、何かの参考にと、つい、この「暦」が見たくなる。とくに中年以上の人たちにこうした行動が多い。これらの行動を目撃した若い方の中には、「それは迷信だ」と軽蔑するものもある。しかし、前者の中には、まじめに研究し、精通している人もいる。人生において、多くの様々な経験を重ねる。迷信とはいったい、それが「当たる」こともある。はたして一体、どちらが正しいのか。

わが身、わが一家がこの厄災になやまされている時には、どうにかしてこれから免れる何らかの方法はなかろうかと模索し、あるいは「何かにすがりたい」という気持ちになる。こうした心理状態に陥ることは、実際に体験した人以外にはなかなか理解しにくいと思われる。おそらく「厄除け」という言葉があるかぎり、こうした行動は続くといえよう。

そして「コヨミ」には堂々とその「厄」と「厄除け」の存在や手がかりが解説されている。これに加え、心霊研究という科学的態度に基づいているはずの人々の中にも、驚くべきことに、一般人にもまして関心を示している人たちがすくなくないことである。

◎ 迷信はどこから

明治時代（明治5年）に、太陰暦は太陽暦に代わって廃止された。しかし、やはり天体との関わりの深い農家等にとっては、この古い暦が今もいろいろな意味で参考にされ、利用されている。

しかしながら、とくに「厄」に対してどのように対処したらよいか、いろいろ参考にしたいという心持を満足させる記事が、太陽暦の名称で刊行されている。たとえば、「神宮館・福寿暦」などの本である。

内容は、九星・納音（なっちゃん）、干支による年齢早見表をはじめ、方位の説明、金神の説明、九星や十二支による男女相性、姓名判断、勝負事に関すること、厄除け消除法（なんのことはない「消除」とは言うが、身代わり不動のこと。お守りを受けるとよいという。その料金まで入念に掲示している）。その他、各人今年の運勢はもとより、とくに家相まで図面入りで掲載してあり、名付けて「幸せ暦」という。

以上、こうした中に「コヨミ」……というより、「厄づきの運命暦」をみていると、どうしても、人間には「厄」というものがあり、それに「つきまとわれている人間」を考えざるを得ないように誘導されているようだ。ことに、不幸の連続で「厄」の存在を肯定せざるを得ないとなれば、そういう考え方にのめり込むことにもなろう。

さて、実際問題として、人間には「厄」がつきまとっているのであろうか。

そこで、陰陽博士時代から考えてみたい。……歴史によると天武天皇の治世に制定された大宝令により、陰陽寮に天文、暦数、災祥、吉凶を掌るため、陰陽博士を集め、官制によって以上の学科を教授したことにはじまる。

しかし、もはや昔のこととなったというより、その時代から、どれ位学問は進歩したか、科学は発達したかを考慮しなければなるまい。それでも陰陽道を認めなければならぬ現在であろうか。

◎ 「厄」は人間にはない・運命も思うままになる

要するに、人間に「厄」があるのか、無いのかは、極言すると人間にそのような運命があるのか、宿命によって不運という「厄」が釘付けされているのか、ということにもなる。

一体、これらをどのように学問は位置づけているのであろうか。もはや今日では天体へも飛行できる時代となり、その進歩は人間に関する科学、とくに「心霊科学」によって、次元である六官以上の存在が明らかにされているのである。

ここでとりあえず浅野正恭先生による、「運命」と「宿命」の定義を紹介しておこう。

① 運命とは偶然的の出来事が、必然性を帯びるに至った場合の境遇

② 宿命とはある原因から必然的に享受するところの境遇

以上はやや、その解明が抽象的であるだけに、難解だと若い方は小首を傾げるかも知れない。しかし、つぎに述べることでご理解いただけることと思う。

★ 「運命はその本人の意思のままに転換することができる。」

本来的には、人間に「厄」というものはないということである。自らでつくっているのである。これは霊的に述べているわけで、一般の人たちには理解しがたいため、多くの人たちは「厄」の存在を信じてしまう。そこで「厄」にとらわれ、年頭から初詣という名目で、「厄除け」に行く人も多い。

それは歴史的な事実からも影響されている。前述したとおり、また科学の進歩していない時代である陰陽師時代、天武天皇による制度化で中国伝来の陰陽道を身につけた陰陽博士たちが、ただ靈感と宇宙の方則の一部を天文学的な推理で国家的な問題から日常的な問題にいたるまでの解決の指針を与えていると、皇室はじめ一般人もそれを認めていた。その後も幾多の変遷を経てはいるが、何か人間と天体との関係については一概に否定することができないこともあり、今日の占い師の手段となって、それに加え統計学的手法も駆使して、学にあらざる単に理屈の上の、いわゆる運命学の時代となっているわけである。

◎ 不幸の原因と厄

ここで問題なのは、心霊研究の立場から「暦」を研究してみるというのではなく、心霊学を学びながらも、その中途半端な気持ちから、「やれ、厄除けの」、「方位の」、「何相が」と言っている人たちが思いのほか多い点である。それを始めて知ったというわけでもなかろう。つい、迷信にとらわれてしまうのである。

一方、近頃はあまり不幸な人、それ以上に病難、交通災害、これに加えわが子、わが妻、わが夫との間の確執が多い。こうしたことは総理府の統計から裏付けされている。

これらのことを含め、さらにその原因、その因子・素をなしているところに迷信といえる強い信仰が認められる。しかし、一般の人たちにはその迷信を正信と考えたがる。そこから出発した誤った理解の「厄」というもの、そしてこれが不幸・不運の原因と信じて「厄除け」を考える。このような考え方を背景とし、一例としてはあるが、とんだ「初詣」もある。こうした行動から考えさせられることは、人間とは「弱い存在」で

もあるということだ。

◎ 厄のない「人間」を考える

このあたりで改めて本来的な人間について考え直してみよう。

心霊研究に基づく「正しい人間観」によると、人間は霊魂で生きている。霊魂によって生命を与えられているわけである。

これら生命によって生きている人間を考えると、その造物主（第一義の神）を想起し、その神の心から考えて、造物主に至る道をさかのぼってみたい。

まず、大宇宙を考える。宇宙は陰陽の交渉から発展し、そこに物質と非物質との二つに分かれ、生命の発芽となっている。その生命には生物の生命と神との二分野からなる。すなわち、神の永遠の生命と、死なる過程を経て神類似の永遠性になる生物の生命ということである（これは「霊魂不滅」ともいい、人間は人間の霊、あくまでも死後も個性は存続、すなわち永遠性を有している）。

この人間の個性の永遠性にはあくまでも向上性がつきまわっている。それは永遠性なる個性が霊魂であるからであり、本質であるからである。

この霊魂には吉凶・幸不幸はないが、その個性である自我霊がもつ向上性の発揮過程において、完全・不完全があり、その不完全こそを「不幸」といい、「不運」といい、「災い」と呼んでいる。これらは決して固定したものではない。進化、進歩の過程の中間名称である。不幸・不運というものはそのことが固定ではなく、過程であるということは、言い換えれば宿命ではないということである。それに対して、運命と言えるかもしれない。

ところで運命は流動する。不幸・不運は幸福、繁昌という完全固定に流れる。これを運命と定め、固定と嘆く必要はない。まして、人間の身についた、つきまとった「厄」ではない。

要するに、人間は陰陽師が考えたような宿命を背負い、方位にとらわれ、その日その日に、それらとの関係や影響によって生きるという消極的なものではない。人間の組織は霊魂によって生命が与えられ、毎日の生活のために肉体をつかって活動させ、人生を送らせている。しかも、その霊魂には本質的に向上性があり、それに基づく生活があり、人生がある。たとえ「厄」のようなもの（不完全から完全への中間）を通路でいえば悪い路、落とし穴といったものであり、それに対して細心の注意を払い、危険を避けるというところの意念も心の中にあるので、それを働かせて向上への途を前進すればよいわけである。したがって、そこに迷い、立ち止まって前途（路）をすべて悪い路であると

考え、決めてかかってはならない。いわゆる「厄」という忌み嫌うものではない。それは一応の通り路の名称である。「除く」ことの必要もない。注意する心を働かせ、避けて通ればよいだけのことである。それどころか、自然に消えてしまうかもしれない。

この路とは物質の路ではない。心の路である。必ず消える。しかし神様が消してくれるのではない。そんなことまで直接神様がタッチすることはない。その代わり神様がそれらのすべてを委ねられている靈魂が存在する。それが「守護霊」という存在である。守護霊を働かせてくださっているのは神様である。したがって、神の代理としての守護霊さんが消してくれる。災いのすべてを、その根元から取り除いてくれる。

しかし、その守護霊の働きとはいえ、完全に働いてもらうためには、本人の心構えが大切である。それまでの無反省のままの気持ちを保持してはならない。われわれは日常、守護霊に自覚させてもらっていることではあるが、こうした「厄」のような過程においては、とくに反省を伴った自覚を呼び起こして守護霊と一層心の波長を合わすことが必要である。

かつて、大自然が、陰陽道で、森羅万象が生まれ、固体したと言っている。その道程に重点をおいて人間と自然、天体を結びつけ、一応の原理的な天文、天理を大所高所から研究したところまではよかったが、真の人間について考えると、唯物的、単なる生命観的、宿命的であってはならないわけである。すなわち、それは靈魂の向上過程として、人はこの地上生活から永遠の生活へという、その原理とその道を解き明かしてくれたもっとも新しい科学、心霊科学を理解して実践しなければならないということである。

一方で、対象を人にしていう理由で、陰陽道の流れを汲んだ運命観、二十八宿といわず、あるいは方位といわず、本来的に厄をもった人間だとするような人間観察はもはや、時代とともに流され去るべきはずであるが、今日に至っている。こうした運命学というものを信じ、人間を観るのにこれ以外に方法はないと言われると、それにとらわれ、それを頼り、助けてもらおうとすることになる。現状ではその影響を受けた人々がいかに多いことか。

全ての人間には、それぞれ本来の道を歩ませ、幸せな一生を送らせようとしている守護霊が、一人の例外もなく先天的に働いている。この組織や構成のもとに地上に生命を得て、「オギャー」の一声を以て地上での修業の出発点とし、永遠への道を歩ませてくれている造物主の心を、このあたりで思い起こしてもらいたい。